

一章 志學・而立・不惑

同志社に学ぶ

私は明治四年の九月に愛媛県の東端れの、香川県に接した今日の三島市に生まれた。幼年の時、田舎の漢学塾で論語や孟子の素読を学び、又寺小屋同様の小学校でも学んだ。当時の小学校は、初等、中等、高等と三つに分れてはいたが、何年で卒業という厳格な規定もなく、読書と習字が主な学科であつた。途中で漢学の私塾に一年近く学び、論語と孟子の素読を卒えた私には、小学校の教科書は比較的自由に読めたので、人より早く小学校を卒業することが出来た。小学校は、校長と助教の二人で、二、三百の児童を受持つて居つた。

小学校を卒えて後、約一年程の間、名目は忘れたが、小学校で教師の手伝いを勤めた。たまたま校長が今治の出身であり、今治はその時分四国における有名なキリスト教伝導の根拠地で、京都の同志社に学んだ者が多く居つた。そんなことから、校長は「当世は英語を学ぶ

ことが、最も必要であるから、同志社へ行つたらどうか。」と私に勧めた。そこで私は校長から、同志社在学中の校長の友人への紹介状を貰つて、笈を負い京都に向つて出立したのである。これは明治十八年で、私が十五才の時であつた。

その時分の新学期は、どこの学校も九月であつた。私は八月に京都で入学試験を受けた。試験科目は、ただ一科目で、それも先生の前に呼出され、十八史略の宋時代の一節を読ませられたのであつたが、それが完全には読めずに、屢々先生から読方の怪しい箇所について、読み直しを命じられた。それで多少不安であつたが、果して見事に落第し入学は出来なかつた。

私は京都に着いた時、西本願寺の附近に宿をとつたのであるが、この宿屋は本願寺詣りの人達の定宿で、私がキリスト教の学徒を志願したことを知つた宿の主人は少なからず驚いたらしかつた。同情した主人は種々奔走してくれて、その頃、西本願寺が設立していた普通学校と云う学校に特別の扱いで入学を許してもらい、その寄宿舎に入れて貰つた。

本願寺の学校であるから、朝晩仏前で勤行をやらせられた。そこに、その年の九月から十二月迄在学したのであるが、どうにもこの学校は自分の氣に喰わないのであつた。生徒の年

令もまちまちで、私と同年配の十五、六才から、年上の二十才前後の者も可なり多かつた。他国から京都へ来ている者は寄宿舎に寝泊りするものが普通で、寄宿舎は西本願寺附近の民家を使用して居った。ここに寝泊りしている連中は、余り勉強をしないのみならず、飲酒は勿論、その他の悪習に染まつて居る年長者も相当にあり、一般に風紀は良くなかつた。余り遠からぬ所に、島原の遊廓などがあり、年長者の遊び場所になつていたようであつた。

日曜日になると、私はいつも京都の北の方にある同志社の附近を散歩したものである。矢張り初めに志願した同志社に、多分の憧れを抱いて居ったからである。三、四カ月普通教校に居た間に、幾度となく同志社の附近を徘徊し、どうしても同志社に入りたい、という念慮は去り難く、遂に一学期を終えたと、意を決して、本願寺の普通教校を退学した。

その時分に、同志社の附近に、同志社予備校というのがあつた。これは矢張り、普通の町家で、教室には机も腰かけもなく、破れ畳の上で教授をする、というお粗末千万のものであつたが、ここで一年勉強すると、同志社本科に無試験で入学できる様になつていた。今から思うと、これは同志社上級生の、今日言うところのアルバイトで出来ているものであつた。私は、ここへ入学した。それでも、本願寺の教室より、学力のつくことに格段の相違を感じ

じ、満足で又愉快であつた。

予備校の生徒は、二、三十名であつて、年令も十五・六才から五十才近くの人まで混つていた様に記憶している。学科は英語が主で、数学・国語・漢文というものはなかつた。或る日授業中、立派な洋服の紳士が、破れ畳の教室に現われ、端座して我々の授業を傍聴せられたのであるが、それが新島先生であつたのには驚ろいた。私はこの時、初めて先生の顔を見たのである。その時先生は私共の中で最年長者と思われる生徒を指して、「年令はいくつか」と問われた。四十六才との答えは、まさしく新島先生より年上であつたであらう。幾つかの質問をされた後、大いにその生徒を激励せられたことを憶えている。予備校の先生は、何れも同志社の上級生のみで、本校の先生は一人も居らなかつた。所謂、今日のアルバイトであらう。

明治十九年の一月から七月までを、予備校で過した私は、九月の新学期から、無試験で待望の、同志社の普通学校と称する本科一年に編入されたのである。本科に入つても、一部の教師は矢張り上級生で、その中で今も記憶に残る人は二、三人あるが、最も印象の深い人は、安部磯雄先生である。先生は後に早稲田の教師となり、野球部の創設者として名を知ら

れ、又後年には社会党の創立者となり、片山哲氏等の先輩として、広くその名を謳われた人で、勿論政党関係からして、総理大臣の候補者となる人であつた。私は普通学校の本科五年を修業する心算であつたが、丁度その頃、同志社の最先輩である下村孝太郎と云う人がアメリカ留学から帰朝されて、ハリス理科学校を創設せられた。これはハリスと云う奇特な米人から十万弗の米貨を同志社の理科教育資金に寄附されたことによるのである。本来は普通学校五年卒業者が、この理科学校に入学する規定であつたが、志願者が少ないため、四年修了者も無試験で入学を許すこととなつた。そこで私は四年修了と同時に五年卒業の連中と一緒に理科学校に入学して、専ら化学を専攻し、三年間の課程を修めて卒業した。その時の入学者は僅かに四人であつたが、その中に後に京都大学の教授となつた知名の化学者、中瀬古博士も居つたのである。次のクラスからは東京農大の三宅驥一教授、今年文化功労章を貰つた東京工大の加藤与五郎博士等が輩出したのであつた。

それから数年の後、同志社全体の財政が一時困難となり、その影響を受けて理科学校も経営難に陥入り、遂に閉鎖せられたのである。此れは我々出身者に於ては甚だ残念至極のことであつた。

下村先生は、京都を去つて、大阪に至り、ガス、コークス会社の社長となられたのであるが、それが確か、今日の大阪瓦斯会社や大阪染料会社の先驅をなしたものと思つてゐる。

私の同志社在学は、以上の様に前後七年の長きに涉つたのである。この間、教室に於ては、教師は、その学科について、單に講義をなし、生徒は筆記すると云う様なことはなく、専ら教科書を使用して、毎日何ページづつと指定せられ、その範圍を独修して、教室に出ては獨特の範圍内に就き、教師と生徒の間に、自由な質疑応答が交換せられるのであつた。それであるから、教師と生徒との接觸が、恰も膝を交えて勉強する気持ちが起り、教師の及ぼす感化は忘れ難いものがある。これが後になつて、私をして母乳教育と云うものを唱道せしむる様になつたのである。母乳教育とは、搾り出した乳汁を器に入れて、各自が配分して飲むのでなく、直接乳首に吸いついて飲むべきであるとするのである。母乳教育に依つて生徒が教師の学力、見識の深淺をも探知することも出来るし、又其の人格の厚薄をも伺ひ知ることが出来る。併し何れにしても師弟の儀礼をわきまえることは、第一義であるべきである。

同志社には生徒を表彰する規定がなかつた。不良を罰する規定はあつたが、『飲酒登楼その他淫樂がましき所へ出入を禁ず』と云う一節があるのみであつた。頗る漠とした箇条であ

るが、能く生徒間に常識的に解釈され、此禁則を犯すものがなかった。私も在学七年の長き間、休暇中と雖も一滴の酒も飲まなかった。煙草は別に禁則はなかったが、生徒自身は飲酒と同様に考えて、口にする者はなかった。今日から考えると不思議な程学校の規則は守られていた。卒業して同級の友人と、大阪から船で帰郷の際、船中で初めて彼と酒を飲んだことは、今も猶能く記憶に残っている。煙草も卒業後、のむことを覚え、今は雅号も煙洲と称して居る程の愛煙家となつた。

私の在学中、只一人だけ此禁制を犯し、処罰を受けたことを記憶している。校長の新島先生は非常な活動家であつたが、病身で大磯に静養しつつ、専ら同志社大学の計画に奔走し、京都に居られることは少なかった。従つて私共は、明治十八年の入学時から、二十二年の先生御逝去までの間に、僅か数回の講話を聴いたに過ぎない様に記憶している。毎朝学校では朝礼があり、七時半から八時迄、全校生徒は講堂に集つて、誰か教師の一人が司会者となり、聖書の一節を読み、讚美歌を合唱し、祈禱を捧げ、その後で訓話を聴くことが年中の欠かさぬ行事であつた。ある朝、新島先生は出席せられ、朝礼の司会者となり、訓話の所に至り、或る一人の生徒の名を呼び上げ起立を命じ、全校生徒の前に於て、退校を申し渡した。

全く秋霜烈日の感に戦慄したのは私のみではなかつたであらう。後にて聞けばその生徒は学校休暇中大阪に遊び、登校した領収書が不用意にも彼の友人の手に渡り、友人がこれを学校に差し出したためであつたとのことである。しかし退校させられた生徒は其後新島先生の手厚き保護指導を受けたことを聞いている。私は当時、学校の取つた厳格な処置に打たれたが、学校を恨むような気持にはならなかつた。この厳しい現実の裏に、何か温かいものが潜在して居ることを感ぜざるを得なかつたのである。後年私は教育に従事し、それらの経験から教育上に無賞罰主義を実行したが、同志社の此の一件も考慮に入れたものであつた。

同志社の生徒間に、私の入学当時は不文律の礼儀があつた。例えば定時刻に食堂が開けると一同食卓につくが、誰も食事を始めない。その内に誰か生徒の中の年長者らしい人が立つて、簡単な祈禱を捧げ、それが終つてから食事をするのが習慣であつたが、生徒の数が増加するに従い、いつとはなしに此の不文律のエチケットが破れてしまつた。しかしこれを破つた一、二の先驅者のあつたことは無論である。又学校では時々、外国の著名な伝導師が来朝した時、講演会を催することがあつた。或る時、講演者が聴衆に向つて、キリスト教を信ずるよう強調した節のある言論をした際、聴衆の一人が立ち上り異議を申立て、一同を驚ろかせ

たことがあつた。当時としては形破りの一種の異論者である様にも見えたが、後日社会に出て其人が日銀の総裁ともなり、枢密顧問官ともなつたことを見て、私の教育上の大なる参考となり、特に多くの学生中に時々ある異端者を見る私の眼は、世間の多数者と違つて居るのを感じるようになった。

私の同志社時代は、世の中が非常に進歩した頃で、太政官制度から、内閣制度と変り、憲法発布、帝国議会の開会などと、急速の進歩をした。しかし未だ交通機関も不充分であるし、新聞雑誌の普及も幼稚で、私共青年学徒も、上級学校へは如何なる進路を取るべきかに迷い、又就職するにも、何等の手引もなかつた。私は同志社を卒業すると招聘を受けたのが、横浜のフェリス女学校であつた。英文で履歴書を送れとのことであつたので、早速自己流で届けた所、それは頗る悪文であつたため、見事に落第した。

同志社に在学したのは、七年間であつたが、回顧して見ると、この間に色々な面で私の一生を左右する素地が作られた感じがせられるのである。有名な大教育家、新島先生が校長であつたが、前述の様に直接々触することはなく、前後数回講堂に於て先生の講演を聴いたのみであつた。然し一種特別の校風が新島先生を中心に醸成せられて居り、上級生を通じて

新島精神を吹き込まれ、その感化を受けたものであつた。教育勅語は、我々の在学中に發布せられたが、学校に於て奉読されたことはなく、私共は發布されたことすら知らなかつた。学校はキリスト教主義を綱領として宣言し、学校の年中行事は、凡てキリスト教の儀式を慣用して居つた。しかし全く自由主義で、生徒に向つて学校からは勿論、誰からもキリスト教を強いられることはなかつた。同志社には別に神学校と云うものが併立せられて居り、卒業後社会に出て直接伝導に従事する人物を養成して居つた。上級生中のキリスト教の熱心家や神学校の学生などは、時々我々に対しキリスト教を説法したが、これは個人的なもので、学校と連絡がある様には少しも感ぜられなかつた。此等の説法は、時には実にうるさかつたが、後から考えて其の人の熱心さに敬服し、又多分に教えられたことを感謝せずには居られない。強いられない学問の勉強、自由なる信仰と云うものは、私の生涯に多大の影響を及ぼしたと信ずるのである。若しその時代の同志社が、其れに反し何らかの圧迫を加えていたなら、学校内部でも多少の不愉快なことが発生し、問題が起つたに相違ないと考えられる。それは実に賢明な学校の処置であつたと思うのである。吾々同級生の間、又上級生との間には実に愉快な関係と連絡があつて、どちらを見ても悪友と考えらるる様な者は一人もなかつ

た。所謂、切磋琢磨の学生々活を送つたと思うのである。校風を作ると云うことは、学校経営の第一義と云う信念をもち、後年私は学校を経営するに当り相当に其の目的を達したと思つた。これは私が同志社に学んだ影響が大きかつたと今も猶思つて居るのである。

熊本時代

明治二十七年七月に同志社理科学校を卒業して、其の年の十一月まで郷里で、ブラブラ遊んで居たが、熊本の英学校と云う私立学校に就職の口があつたので、理科と数学の教師として赴任した。校長は蔵原惟郭さんで洋行帰りの、特色ある雄弁家で、後に東京から代議士に出た人であつた。赴任して直ちに熊本市外の大江村と云う田舎の家に下宿した。此家に居つた前の下宿人は有名な内村鑑三さんで、学校の私の受持ち学科も内村さんの後を受け継いだのである。従つて下宿からも、又受持ちの生徒からも、内村さんに就いての色々な面白い逸話行動を聞かされた。暫く此の下宿に居たが、其後市中に移つた。

私は赴任の時の約束は月給二十五円であつたが、實際受取るときは十五円にねぎられた。其の時代熊本での下宿料は一日米一斛と云う、相場であつたから、月三元は普通の下宿料

であつた。私は給料のことは、やかましく云わなかつたため、在職中満足に給料を支払われたことが一度もなかつた。翌年になつて、東洋の風雲が段々怪しくなり、絶に其の八月に日清戦争が勃発した。夏休みの帰郷の際には、もう動員があつたと見え、熊本から小倉までの間は、召集の兵士で汽車は満員となり、途中沿道の畑の中から百姓連中が、鋤をふり上げて至る所歡送する風景は、悲壮であつた。夏休みが終つて再び熊本へ歸つて見ると、市中に軍馬の集まり居ることや、其他の様相も變つて、戦争の雰囲気が感ぜられた。下宿へ落着くと、主婦は如何にも氣の毒そうに、私に向つて戦争が起り諸物価が騰貴したので、下宿料を上げてくれとの要求であつた。聞くと五十錢上げて三円五十錢にしてくれとのことであつた。この一事を考えても当時の社会經濟の様子が知られるであらう。

学校へ行つて見ると、学校も様子が變つて居る。校長は雄弁家で又頗る情熱家であるので、戦争であるから学校は閉鎖し、職員生徒は義勇兵として立つべきだ、と発案して、授業も何もなかつたのである。私は義勇兵になるのがいやで、理由をつけて反対した。あの有名な露土戦争の時クリミヤが戦地となつた際、化学の大家メンデレエフが学校をクリミヤからオデッサに移転して学校を継続した例を引いて熱心に反対した。校長は私に對し面前では

なかつたが、非国民扱いをしたものであつた。自然この様なことから、辞表も出さず、辞令ももらわず、其のまま英学校と関係がなくなつてしまつた。昔は随分何事もぞんざいのものであつた。

暫くそのまま浪人したが、いくら物価が安いとは云え、いつまでも収入のない、浪人では居られないので、或る縁故をたどつて熊本第五高等学校の化学の主任教授大幸勇吉先生を訪問した。先生とは初対面であつたが、事情を述べて、私の身のふり方を依頼した。ところが大幸先生は、「化学教室の助手に君を採用したいが、今一学期待たねばならない。君は同志社出身であるから英語が出来るであらう。幸い現在学校は英語の教師が欠員なので、君さえ承知なら其れに推せんする。」とのことであつたので、私も意を決して推せんを依頼した。月俸十二円以上になると、文部省の認可を要するが、其の以下なら学校長の独裁で任命し得るので、とりあえず十一円五十銭の嘱託員となつた。高校の俸給は収入が確実であるので、英学校とは異なり、これで生活は全く安定した。其の代りに受持つた英語の、ワシントン・アーヴィングのスケッチブックは私にはすこし大役で、毎晩夜遅くまで、時には二時頃まで下調べのため勉強した。私の生涯で最も苦しい時代であつた。しかし最も緊張した時代であ

つた。とにかく此の苦しみ時代を無事にきりぬけ、予定通り次の学期より化学教室の助手となり、大幸教授の講義の実験準備を受持ち、かたわら学生の化実実験を担当した。

当時五高には教師として夏目漱石、小泉八雲、秋月胤永と云う様な名士が居つた。私は職務の余暇を以て、夏目教授の講義を聴いた。小泉八雲先生や秋月胤永先生には直接習わなかつたが、其の風貌に接したことは、後々まで忘れ得ぬ印象である。秋月先生は幕末、東北戦争の際には会津の城を守つた大将の一人であつた。当時は西南戦争を去るまだ十数年であつたので、田原坂や八代の球摩川の土手へ行けば彈丸の跡は能く見え、封建の遺跡は何処にも忍ばれた。秋月先生の如きは生徒の名簿に、其出身藩名をききだし記録して居つた。独り秋月先生のみならず、今から考えて見ると特色ある教師が少なからず在職して居つた。五高に於いて猶私の記憶に残るものは修学旅行であつた。修学旅行は海路に於ける船以外は凡て徒歩であつた、遠方は福岡県の呼子、名護屋までも行つたことがあつた。教師の中に歴史の教授で武藤虎太と云う人があつて、歴史上の古跡では一同を集め、至るところで講演をせられた。これは、実に有益で楽しく、今も記憶に充分残つて居る。この思い出の上に立つて今の修学旅行を見たり聞いたりすると、些か飽き足らぬ所があるように思えるのである。

東京帝国大学理科大学時代

私は学歴としては、同志社の理科学校を卒業したのみで、中等学校教員の資格を持たなかった。その頃毎年一回、中学校、師範学校の教員資格を与える検定試験があつた。私は化学の教員免状を得ようと思い、試験を受けるため東京へ出た。当時試験は東京帝国大学で行われ、その時の試験官は、桜井錠二、池田菊苗の両先生であつた。二十一人の志願者の中、幸にも私一人だけが合格した。試験終了後突然私は桜井先生の部屋に呼ばれ、「お前が大学で勉強したければ、専科生として無試験で入学させてやろう。」との思いがけぬ勧誘を受けたのであつた。私は桜井先生とは初対面であつて、先生のこの申出には、いたく感激した。それから私は熊本に帰り、同じ入学をするなら専科より本科にしようと考え、その後一年間、化学の助手をしながら、高等学校の学科を独学で勉強し、翌年高等学校卒業の資格試験に合

格して、明治二十九年に理科大学の化学科に入学したのである。

三年間の理科大学在学中は、別にこれということもなく無事に修学し、そして卒業した。入学したのは五人であつたが、事故のため卒業の時は三人であつた。同級の二人は名誉教授片山正夫君と浜松高工初代校長関口壮吉君で関口君は惜しくも早世した。当時理科の卒業生で実業界に出る者は殆んどなく、実業界からも理科に人を求めることは稀で、大概是学校の教員となるのが普通であつた。私は実業界を望んでいたが適当な職がないので、或る人の世話で島根県の浜田中学に就職をしようとして居つた。当時の卒業期は七月で、新学期は九月に始まるのである。卒業式の日、たまたま式場に列せんとして下宿の門を出た時、私宛の一通の封書を受取つた。それは仙台の第二高等学校の校長、中川先生からのものであつた。先生は三年前、私が熊本五高に奉職当時、その校長であつた人である。書面によると、「お前は今年大学を卒業する筈だが、卒業したら仙台に来て二高の講師となれ。その傍ら仙台の二高には医学専門学校が附属しているから、その方の講師を兼任して暫く忍耐せよ。その中に教授の席が空くだろうから。」とのことであつた。その頃の大学卒業者は直ちに、高等学校の教授として採用せられたのである。私は浜田の方を断り、仙台へ赴任することとした。

そして翌年の春まで両校に講師として勤め、春になると二高教授に任命せられて、明治三十七年の夏までの満五カ年間を勤続したのである。

仙台二高教授時代

この間の出来事の二、三を記してみると、明治三十七年には日露戦争が起つた。ロシアと云う世界一の大陸軍国と戦争を始めるのであるから、全国民に非常に大きい衝動を与え、二高に於ても、兵式体操の教師の多くは、予備・後備の軍人であつたため全部召集されて、兵式体操は出来なくなつてしまつた。或る日、全校の学生が講堂に集つた機会に、私は学校長の許可を得て、全校生徒の前に立ち、「学生諸君は兵役の義務を免除され、この大戦争の間にあつて静かに学生々活を送つてゐる。教師が居ないからと云つて、兵式体操を休んでしまふのは残念至極で、学生自身がこれを起し、その堪能な者は自ら隊長となつて継続すべきではなからうか。」との趣旨を述べ全校生徒の蹶起を促したのである。当時の二高は一部二部三部に分れ、卒業後帝国大学へは、一部は法文二部は工科理科、三部は医科に進学するので

あつた。私は三部を担当していたのであつたが、三部の学生は、所謂この自治的体操に全員賛成し、二部も大半は賛成であつたが、一部は反対した。教頭であつた三好愛吉先生は、この反対を遺憾として自ら調練服を作り、仙台の四連隊に行き兵式体操を習得して帰り、自分が大将となり、全学生を率いて自治体操を行つたのである。その時、三部の隊長であつた学生は加藤耕三君で、後年横浜で関東病院を経営し、横浜高工の校医となつた人である。

当時の文部大臣は、久保田と云う人で、たまたま東北を巡廻した際、二高に立寄られたが、学校で自治的兵式体操による分列式の礼を受けただけで立去られたこともあつた。三好愛吉教頭は、後に二高校長となり。それから宮内省に転じ、秩父、高松、三笠の各宮様の傅育官長になられた。非常に独立果斷な稀に見る官僚臭のない教育家であつた。

又、その頃学校では色々な催しが、全校を挙げて行われた。そして催しの後では必ず慰労休暇を請求したので、学校でもその弊に苦しんで居つた。或る時、三好教頭は、請わるままに思い切つて約一週 of 長きに亘る大運動会を許可した。三日・四日とプログラムが進む中に段々だれ気味となり、最後は甚だ振わない結果に終つたのであつた。そこで三好教頭は痛烈な批評を加えて生徒を訓戒したのである。その後は教頭の指示に従い種々な催しも自然に

引締つたものとなつた。二目以上の学校の休業は文部省の許可を受けねばならぬ内規があつた。この大運動会は、中川校長が上京中で、言わば留守中の教頭独断行為であつたのである。それが又、文部省の官吏が仙台地方に来て、たまたまその行事を見て帰り、本省に報告すると同時に、上京中の校長にも知らせたので、内規違反行為として問題にならうとしたが、結末はどうであつたか、免も角表面は何事もなく済んだようであつた。この様な点で、文部省とその頃の学校の間には、実によい諒解と融通があつたものとみえる。

在職中、私は庭球部長として働いた。その間他の部と論争もしたし喧嘩もした。時には校友の間に不穩の空気を醸し出したものである。学校長は私を呼び、庭球部長をやめて弓道部長になれとの相談があつたが、これはひどい左遷であつた。中川校長は弓道に堪能な人であり、私は校長の意をよく察したので、何等の異議なく弓道部長を引受けたのである。

もともと私は、実業界を志したのであるが二高の教授となつた。戦争はあつたが、実業界も殊に私の専門の化学方面に関する工業は、更に発展の傾向は見えないので、その方面に出る機会は愈々少なくなり、私も断念して、一生を教育界で続けようと決心した。教育界に在るならば、高等学校のような大学への予備教育の場所でなく、教育の本舞台である師範系統

の学校に転じたいと考え、その由を校長に委しく陳べて幹旋を依頼したところ、中川校長は自らその労をとつて、広島高等師範学校に空席を見出し転任させて呉れたのである。

仙台二高時代の私にとつて、終生忘れ得ぬ一件を記して置きたい。これは屢々話したことではあるが。或る一夕、中川校長を訪ねて私の待遇についての不満を訴えた。この不満は私の自発的なものでなく、ある同僚から煽動された結果である。校長はしばし無言の儘で居られたが、「君でも、そういうことを云うのか。」とただ一言。その一言で私は所謂冷汗三斗、取り返しのかぬ羞恥に、平身低頭し「よく解りました。」と申し上げたのみで、余談に移つた。以後広島に三年、外国で二年、其の前二年合計八年一度も昇進せず、所謂三年一度も遷らず十年同席を暖めたが、待遇に関しての不平不満は、一言半句も云わなかつた。外国留学から帰つて、蔵前の高工に移つたとき、私の待遇が同僚に比して非常に劣つてゐることに気づかれてか、昇級の機会がある度に引き上げられ、数年の間に世間並になつた。これは私にとり終生忘れ得ないことの一つである。

広島高師時代

教育の本舞台と信じ、期待をもつて赴任した広島の高師範は、想像とは全く逆で、私は非常な失望を感じた。学校は実に自由が少なく、色々な規則の下に圧迫せられている様に思われた。学生は全部寄宿舎に収容され、筆墨其他文房具類に至るまで一定のものが支給せられ、外出の際の門限は厳しく、凡てが厳格な監督の下にあつた。教師も同様で宴会に酒を用いることもなく、食堂での毎日の会食も生徒と同じものを、校長を始め全職員が喰べたので、弁当代も学生と同額であつた。学生の中には、この事に不平の者があつたので、よく聞いてみると、教師は生徒と一見同じ食事であるが、質がよいとのこと、要するに教師は生徒の上前を兼ねていると云うのであつた。之れを私は能く探求してから以後私は近所の西洋料理店から弁当を運ばせて、ただ一人異つた食事を選んだのであるが、その後食堂では各

自、思い思い好むものを食べる様になった。

又当時、学校には運動会などの催し物は一切なかったので不平が起り、是非運動会を催したいと、不穩の行動は時々現われた。その黒幕は、同調者はあつたにしても私一人で、学生中の二、三のリーダーと共に学校に対抗した。この連中とはテニスコートの一隅で計画を練ることとし、私の宅の訪問は一切禁じ、私宅附近を徘徊することさえ私は禁止する迄にした。遂に学生は、あの嚴肅な講堂での校長訓話に対し、床を踏み鳴らして妨害するような状況となるに至り、学校は折れて、運動会を催すこととなった。その成績は非常によく、満足な成果をおさめた。しかし学校当局は、これまでに至る間には、必ず煽動した者がある筈として、それは鈴木であろうと嗅ぎつけ、その証拠を挙げて論旨免官にしようと、教務主任の小西教授（後の京大総長）と赤木教授の兩人を私宅に差向け、夜の二時に至る深更迄、私を吊し上げたのであつたが、私は既にそのことあるを感じていたので、何ら証拠を握られずに終つた。

この様なことが、万事解決して学校が円滑に運営されて行つた後、小西君は、私に対し、あの時は、学校長の命を受け我々兩人はこれこれの目的君を訪問し、誠にお気の毒であつ

たが、止むを得なかつたと洩らされたのを聞いた。

広島に在職三年が將に終ろうとした時、帝大の桜井先生から蔵前の東京高等工業学校への転任と、欧州留学の勧誘があつた。実業に志してその意を得ず、教育の本舞台に在つてその教育に飽き足らず思つていた私は、実業に直結する工業教育ならば、と直ちに決心して喜んで転任承諾の旨を通じた。

独 乙 留 学

欧州留学の内意を受けてから出発までは、準備手続等のため半年を要するのが普通であるが、丁度学校長の北条さんが国際教育会議出席のためロンドンに行く準備中であつたので、校長は私の真意を了解してことから急に私と同行しようと誘われた。そこで私は留学の手続を急いで貰い、五月に内意を受けて七月も半ばに至らずして、校長と同船で欧州に向けて出発することが出来た。

欧州での私は専らドイツのハノーバーに滞在しその地の高等工業に席を置いて勉強した。その間に偶然にも蔵前高工の手島校長がイギリスに来て、ドイツに渡り私を尋ねられた。私はその時始めて手島校長と面会し、親しく歓談することを得たのである。手島校長は幾度もアメリカを視察して欧州に渡つたこともあつたが何れも太平洋、大西洋の往復であり、イン

ド洋を航行したのは、この時が始めであつたとのことで、先生は、「南洋諸国には化学工業の原料が実に豊富で、あれ程、豊かであるとは、今回まで夢想だになかった所である。我國は今後この方面に大いに力を尽さねばならない。」と懇々と私に語られた。私も同じコースを通つて欧州に來たのであつたが、見聞いたものは、ただ珍らしいと云うのみで、校長の意見を聴いてから初めて私の不注意と不見識に気付き、同時に先生の詳しい觀察に敬服し感激したのであつた。その後、私はオランダに行き、學校を觀察し設備を見たのであるが、同時に蘭領印度との關係等につき興味をもつて見學し得たことは、全く手島校長の啓発によるものであつた。後年横浜高工敎助援の堀江不器雄君を南洋専門の在外研究生として派遣したのも、その因はこの辺に在るのである。南洋に文部省から派遣せられた者は、他にも多少あるが、これらは欧米留学への途次に視察する程度で、南洋専門は堀江君が唯一人であつたのではなからうかと思う。

又この時、校長は補習敎育の必要を諄々と説かれ、藏前の高工にも夜間補習敎育の設備があることなどを話された。そして、「このハノーバーは相當な大都會であるから、各種の補習敎育機關が完備していると思う。案内してくれ」との依頼であつた。それまで私は補習敎

育と云う名さえ知らず、夜間の学校には全然無関心であつたため、この依頼には全く閉口したが、何とか土地の人から聞き出して、先生の申出に応ずることが出来た。其の後、英国に行つた際、マンチエスターで補習教育を進んで視察したのも、後年私が横浜高工を經營するようになつて夜間補習教育に意を用いたのもその因縁である。この時、私が創設した補習教育は現在市立横浜工業高等学校にまで發展している。

私の留学は二年の期限であつたが、本省の都合で十カ月延期せられ、二年十カ月になりアメリカ經由で帰朝した。そして帰国後は蔵前の高等工業学校に職を奉じたのであつた。